

乳房炎部会から

第56回北海道地区 三学会に参加して

9月15日と16日の両日、第56回北海道地区三学会が釧路において開催されました。久方振りの釧路での開催でしたが準備にも余念なく、さらに学会当日は晴天にも恵まれて素晴らしい学会となりました。また、一日目終了後の記念パーティーでは素晴らしい料理はもちろんのこと、芸を凝らした余興もあり、勉強になっただけでなくとても楽しい学会にもなりました。今回、乳房炎部会としても学会に参加して来ましたのでその概要を報告致します。

会場は釧路川を望む釧路市観光国際交流センターであり、外の爽やかな空気とはウラハラに会場内には全道からの参加者の熱気で溢れかえっておりました。産業動物獣医学会、小動物獣医学会ならびに獣医公衆衛生学会の三学会が4会場に別れ、都合65題の発表があり、それぞれについて活発な質問・意見交換がなされていました。そのなかでも、道東での開催ということもあって産業動物学会での発表が一番多く、全部で36題の発表がありました。そのなかで乳房炎関連の発表は3題と数は少なかったものの、内容的には新しい知見あり学術的な調査もありと、おおいに参考になるものでした。若干ではありますが、発表の内容をかいつまんでご紹介いたします。

● 「乳頭テープ法による乳牛の環境性乳房炎防除」

発表者は日高NOSAIの扇谷先生。乳頭に医療用の紙テープまたは布テープを巻くことで乳頭口からの細菌の進入を防ぎ、環境性乳房炎を防除するというものでした。搾乳終了後ディッピング液を乳頭に浅く浸した後、幅6cm長さ10cm程度のテープを乳頭と平行に貼り付けます。2戸において乳頭テープ法を実施したところ、いずれの農家においても乳房炎の治療費が昨年より減少し、バルクの体細胞数も17万から8万、7万から5万に低下したとの結果でした。またテープの経費は月に1,000円程度だそうです。「搾乳時間が余計にかかるのではないか」との質問がありましたが、これに対しては始めた当初は時間がかかったが、続けるうちに乳頭口の状態が改善されて乳の出が良くなり、慣れてくるとかえって搾乳時間が短くなったとのことでした。

● 「乳牛の乾乳時と分娩前のタイロシン2セット投与による黄色ブドウ球菌性乳房炎の治療効果」

発表者は宗谷地区NOSAIの小森先生。伝染性である黄色ブドウ球菌性乳房炎は獣医師・酪農家とも頭を悩ませる問題です。黄色ブドウ球菌性乳房炎は泌乳期の治療ではなかなか治りにくいため、最近では乾乳期治療が使われるようになってきています。この発表ではタイロシンを乾乳時と分娩前に二回投与することで、今までは治療対象とならなかった多分房罹患牛に対しても治療効果を認めているものでした。実験での治癒率は45%とのことでしたが、4分房罹患牛では効果を認めなかったとのことでした。黄色ブドウ球菌で悩んでいる方々にとってはとても興味深い内容だと思いますが、発表者の先生もコストの問題と抗生物質の多用という点を問題点に挙げていました。

● 「大腸菌性乳房炎多発牛群における大腸菌汚染状況の調査」

発表者は十勝NOSAIの下田先生。環境性乳房炎の中でも時に重篤な症状に陥る大腸菌性乳房炎は酪農家にとっては恐ろしいものだと思います。大腸菌は環境に常在しているといいますが、乳房炎の原因菌が実際にどこにいるのかを科学的に証明した発表でした。大腸菌性乳房炎多発牛群において牛舎環境、搾乳機器、さらには飼い猫の糞便からサンプルを採取して大腸菌のDNA解析

し、過去に発生した乳房炎原因菌と比べたところ、牛床と飼い猫の糞便から培養した大腸菌と一致したそうです。また、牛舎での猫の飼養を禁止したところ、大腸菌性乳房炎の発生が減少したとのことでした。大腸菌性乳房炎の予防には牛床をきれいに保つ、というのは分かっていたのですが、それを科学的に証明し、さらにいわゆる牛舎猫についても問題提起をした点で非常に興味深いものでした。

音別白糖支所家畜診療課 鮎川 悠

